

『中国漢字文化大観』

(北京大学出版社1995年 何九盈、胡双宝等)
〈第十四章 (一)〉(王若江)

趙 晴 (訳)

漢字と農業 (1, 2)

中国の農業はその誕生から数えるとすでに一万年近くの歴史がある。中華民族の生存と繁栄、文明と進歩はすべて農業と密接な関係がある。中国の農業発展史はまさに中華民族の文明史でもある。しかしながら、この農業発展史は一体どのように展開してきたのだろうか。もちろんさまざまな視点からの研究が可能であるが、中でも農業と関係する漢字の創造、その字形構成の根拠及び絶えず繰り返される派生の歴史的経緯に対する考察は非常に有意義な視点である。それによって、我々はいくつかの重要な情報を獲得し、中国農業発展史の真相の一部を明らかにすることができるのである。より具体的に言えば、農業と関係する漢字には、中国の農業文化の発展の痕跡が鮮明に残されているということである。

1. 農作物

前漢の『淮南子・修務訓』は次のように言う。

太古の時代、民は草を食べ水を飲み、樹木の実を採り、タニシやドブ

ガイの肉を食べており、疾病、中毒、外傷が多かった。そこで、神農は始めて民に五穀の栽培を教え、土地の善し悪し（燥湿、肥瘠、高下）の観察を教えた。また、百草の滋味と水泉の甘苦を嘗め、民に避けるべきものと採るべきものを知らしめた（「肥瘠」は土地が肥えているか痩せているか）。

伝説は、農業が木の実の採集から始まったことを教えている。人々は生きるために絶えずさまざまな探索を繰り返し、貴重な体験を蓄積し、そこから自覚的に効率よく穀物を栽培する段階へと進んでいった。伝説の中の神農氏は実際には何代にもわたる実践者の化身である。考古学者や農業史学者の考証によれば、殷代から周代にかけては原始農業の末期、集約農業の萌芽期に当たり、農業生産のレベルはすでに一定の水準に達していた。甲骨文字には「禾」「黍」「麦」「草」「秬」「畚」など、七種の農作物の名称が記録されているが（裘錫圭「甲骨文中所見の商代農業（甲骨文字から見た殷代農業）」、華南農業大学農業歴史遺産研究室編『農業史研究』第8集、中国農業出版社、1989年）、当時の農業に関する主たる資料は周代の『詩経』であり、『詩経』に見られる農作物の名称は「黍」「稷」「麦」「禾」「麻」「菽」「稻」「秬」「粱」「芑」「苳菽」「秠」「来」「牟」「稊」など十五種に上る。（斉思和「毛詩穀名考」、『燕京学報』第36期、1949年）ここから、殷周時代の農作物の品種はすでに相当に豊富だったことがわかる。

禾と年

「禾」の字は甲骨文字では「𥝌」と書くが、一株の穀類を描いており、下部は根、中央部は葉、上部は一方に傾き垂れた穂である。字形から見ると、「禾」はもともと粟あわの専用名であったようであるが、甲骨文字ではすでに広く穀類一般を指し、非常に使用頻度の高い文字であった。例えば、卜辞によく見られる「𥝌(求禾)」は、穀物がよく育つことを祈

求するという意味で、「𠂔禾于河」は「求禾于河」（河神に豊作を祈る）と読む（羅振玉『殷墟書契後編』上二二・三）。人の認識というものは個別から一般へと向かうものである。「禾」の広義用法の出現は、当時の人々が、多くの場合、すでにさまざまな穀類の具体的特徴を超え、それらに共通する特徴を一般化していたことを物語る。穀類の汎称となった「禾」は「字根」（会意文字、形声文字の形符）の役割を担うようになり、「齋」「秣」「稻」「秈」「稷」「秀」「杆」「秧」「稗」「稼」「稿」など、農作物と関係する多くの新しい漢字を作り出した。

「年」という字は「禾」と密接に関係している。甲骨文字で「年」は「秝」と書き、人の頭の上に実った穀類が描かれており、穀物の収穫を意味する。現在で言う「年成」（一年の収穫）である。『穀梁伝・桓公三年』に「五穀皆熟^{みの}を年有^{みのり}りと爲す」とある。殷代の人々は作柄の良し悪しを重視し、甲骨文字にはよく「受年」や「受禾」のような豊作か否かを問う占いが出てくる。このような形式では「年」と「禾」は同義であり、後世にもこの意味は受け継がれている。例えば、北京の天壇公園には「祈年殿」という封建時代の帝王が天を祭る場所があるが、「祈年」とはまさしく五穀豊穰を祈るという意味である。「年」という字の常用義は時間概念を表すが、それも穀物に関係している。古代の中原地域では穀物が一年に一回収穫できた。そこで、植物の成長周期に対する観察を通して、時間周期としての「一年」という概念が生まれたのである。このような時間概念は、星座を観測することで認識された「一年」より早く生まれたことが、すでに資料によって証明されている。字形の変化により、現在では「年」と「禾」の密接な関係を知る人は少ない。

黍と稷

「黍」の甲骨文字は「𠂔」^{しよ}と書き、キビの姿を描いている。字形の下部は根であり、上部は左右に垂れた穂である。「黍」は原始農業時期の

重要な作物であった。「黍」は成長期が短く、乾燥にも寒さにも強く、低い生産能力と寒冷な気候という当時の中原地域の条件に適合していたため、広く栽培されるようになった。

「黍」は殷周時代の人々にとってたいへん重要な作物で、五穀の長と呼ばれ、祭祀には必ず献上された。甲骨文字に「登黍の礼」に関する記載がある。「登黍の礼」とは、収穫した「黍」を鬼神や祖先に祭り、敬虔の意を表すことである。「黍」は生産性が低かったため、社会生産力の向上に連れて、「黍」を含む生産性の低い作物は徐々に生産性の相対的に高い穀類によって置き換えられていった。春秋時代、あるいはそれ以前の時代に、「黍」の作付面積はすでに非常に少なくなっていた。『孟子・告子下』に「夫れ貉^{はく}は、五穀生ぜず、惟黍^{ただ}のみ之に生ず」とあり、ここから、孟子の時代、黍はすでに地勢の高い寒冷地でのみ栽培され、しかも五穀から外れていたことがわかる（「貉」は古代中国の東北部にいた民族）。しかし、祭祀のときは依然として鬼神や祖先に「黍」を献上していた。それは当時の人々が伝統を尊び、自らのルーツを忘れないようにしていたことを示している。

「黍」を供物としたのには、おそらく「黍」の芳香がもう一つ理由である。祭祀に当たり供物を祭るのは、祭祀者の敬虔さを表すためにすぎず、鬼神や祖先が実際に享受できるわけではない。しかし、芳香であれば鬼神や祖先にも届くであろうという発想である。『尚書・周書・君陳』に「黍稷馨^{しよしよくかくわ}しきに非ず、明德惟れ馨し」とある（「黍稷」はキビの総称）。これは言うまでもなく統治者の説教である。「黍」は決して芳香を放たない、芳香を遠くまで伝えるのは光明な徳行のみであると言っているが、「黍」は熟すと人の心に染み入る爽やかな香りを放つ。また、脱穀した「黍」は「大^{もち}黄^{きび}米」と呼ばれ、蒸すと鮮やかな黄色になり、たいへん香ばしい。

殷の人々は飲酒を好んだ。甲骨文字によく見られる「鬯^{ちやう}」の字は、黍に香草を加えて醸造した「におい酒」である。甲骨文字の「黍」は、「黍

に「水」を加えて「𩚑」とも書いた。許慎の『説文解字・黍部』は孔子の「黍は酒と為すべし。(黍という字は) 禾、入、水(から成る)なり」という言葉を引用している。そうすると、「黍」に「水」を加えた「𩚑」という字は、おそらく「酒」を指すのであろう。この字形の表す意味はまだ研究する余地があるが、しかし古代の人々が「黍」を用いて酒を造り、その香りが「黍」よりもさらに濃くて強烈であったことに疑いはないであろう。我々の先人は鬼神の好みをよく知っており、祭祀には必ず「黍酒」を献上した。後に「黍」が「禾」と簡略化され、現在の「香」の字になった。中国語の中で「香」は芳香の汎称であることが多く、特に穀類の香りを指すときは「香」を形符として造られた「馨^{けい}」の字を用いる。

「黍」は粘性食物で淡黄色の種子は粟より少し大きく、食物として、口当たりも味覚もきわめて優れている。生産高が低いため、殷周時代には貴族しか口にすることができなかつた。『詩経・周頌・良耜』に「或^{ある}ひと來りて女を瞻る、筐及び筥を載う、其の饗は伊れ黍」とある(「筐」は四角い方形の竹かご;「筥」は円形の竹かご;「饗」は畑で働く人に届ける食事;「伊」は判断詞)。後漢の鄭玄の「箋」はこれに注して「豊年の時は、賤者と雖も猶^{なお}黍を食す」と言う。豊作の年には庶民でも「黍」が食べられたのである。逆に言えば、平年並みや凶作の時には、庶民は「黍」を食べられなかつたということである。これは容易に理解することができる。殷周の時代を持ち出すまでもなく、今日の北方の農村においても、年越しのときに限り「黍」を使って餅や粽を作り「新黍」を味わう。「黍」は決して日常の食物ではないのである

「黍」は祭祀および貴族の生活と密接な関係を持っていたため、殷代の統治者は「黍」の栽培と収穫状況を非常に重視し、卜辞の中には殷王が自ら「黍」の植え付けや取り入れに参加する記録さえ見られる。そして、当時、祭祀に使う「黍」は殷王が手ずから植えた「黍」から選ばな

ければならなかった。例えば、「壬寅みづのえとらに卜して賓貞とう、王、往きて衆を以ひきいけい問きびに黍すか」（「黍」は黍を植える；『殷墟書契』前編五・二〇・二）、「庚辰かのえたつに卜して賓貞う、恵王、南の問に黍すか」（「黍」は黍を収穫する；『殷墟文字綴合』九五四七）など。春秋時代以降、「黍」の地位は低くなった。『韓非子・外儲説左下』は以下のような逸話を載せている。

魯の哀公が孔子に桃と黍を下賜された。孔子はまず黍を食べ、その後で桃を食べた。同席の者たちはみなそれを見てこっそり笑った。哀公は孔子に、「その黍は食べるものではない、桃の皮を擦って毛を取るためのものだ」と言った。それに対して孔子は、「存じております。しかし、黍は五穀の長であり、祭祀に用いる尊い供物であります。一方、桃は果物の中でも下等なものであり、祭祀の供物として宗廟に置くことさえまかりなりません。君子は卑しいもので高貴なものを磨くとは聞いておりますが、高貴なもので卑しいものを磨くというのは聞いたことがございません」と答えた。

この逸話から、春秋時代も末期になると、支配階級を含むほとんどの人々はすでに「黍」を軽視しており、孔子のようなひたすら周礼を復興しようとした者だけが「黍」を重視していたことがわかる。しかし、孔子の行動が人々に理解されることはなく、人々の目には滑稽にさえ映ったのである。

稷しよく（もろこし[きび]）。甲骨文字に「畚」という文字がある。畑に作物が一本が生えているような字形である。陳夢家の考証によれば、「畚」は「齋」である。『説文解字』に「齋は稷なり」とあり、「齋」は「穧」とも書かれる。「畚」は「齋」「稷」「穧」などの初文（最初の字形）であり、「齋」「稷」「穧」は字義を同じくする後発の形声文字である。（この三字はそれぞれ「齊」「祭」「夏しよく」を声符とするため、日本語における音読みは一様ではない）。

「黍」と同じく「稷」も原始農業時期の重要な作物であり、しかも両

者は非常に密接な関係にある。『詩経』には「黍」と「稷」が対比あるいは並列された例がよく見られる。

黍稷重穋、植穉菽麥。(「重」は「種」に通じ、早く植えて遅く成熟する稲；「穋」は「種」に通じ、遅く植えて早く成熟する稲；「植」は早く実る稲；「穉」は遅く実る稲；「菽」は豆類の総称；『詩経・魯頌・閟宮』)

彼の黍離離たり、彼の稷の苗あり。(「離離」は整然と植え付けられているさま；『詩経・王風・黍離』)

昔、我往きしとき、黍稷方に華けり。(『詩経・小雅・出車』)

古代の人々は祭祀を行うとき、「黍」と「稷」を同時に供えた。『荀子・礼論』に「饗には玄尊を尚にし、而して酒と醴を用ひ、黍と稷を先にし、而して稻と粱を飯わしむ」とある(「饗」は四季の祖廟の祭り；「玄尊」は祭礼において酒の代わりとした清水を入れた樽；「尚」は上に通じ、上に置く；「醴」は甘酒)。

「稌」という字は、「稷」が祭祀に使用された事実を反映している。「祭」は「稌」の字音を表す声符でもあり同時に、字義と関わる形符でもある。「黍」と「稷」の関係が密接な理由は、両者の形状が非常に似ており、一般の人には区別が難しいからである。古代の人々は、「黍」と「稷」を同類の植物とみなしたが、呼び名は変えた。穀実に粘り気の強いものと弱いものがあつたためである。古代の人々は「黍」を五穀の長としてあがめ、同類の「稷」も五穀の長としてあがめた。「稷」の生産高は「黍」より若干高く、粘り気が少ない。明の王象晋の『群芳譜』は「飯に炊けば疏爽にして、香は美なり」と形容しており、「稷」は人々の日常生活との関係が「黍」よりも密接であつた。そのため、「稷」は黄河流域の早期農作物の中で高い位置を占め、「穀神」と封じられるまでになつたのである。

中国には史上「穀神」が二人いた。一人は炎帝の息子の柱で、もう一人は周の始祖の棄(舜)である。言い伝えによれば、太古の時代、炎帝

族はすでに農業生産を始めており、人々は炎帝族の首領を神農氏と呼んだ。神農氏の息子の柱は当時の農業技官で、穀物の栽培を担当していた。当時の人々は重要な農作物である「稷」を農業技官の名前とし、柱を稷と呼んだ。おそらく稷の功績が突出していたのであろう、太古の人々は彼を穀神としてあがめ、祭祀を怠らなかった。周の始祖である棄の母親の姜嫄は炎帝族の末裔であった。棄は母親の影響を受け、小さい頃から麻や豆類を栽培し、大きくなってからも農耕を好んだ。人々はみな彼にならぬ、堯は彼を農業技官に抜擢して農業生産を大きく発展させた。人々は棄を后稷と呼んだ。異なる時代において農業を担当し、農業生産を発展させた二人の人物は共に神のようにあがめられ、稷と呼ばれた。ここからも、「稷」の作物としての地位の高さが見て取れる。

古代の人々は土地と食糧を立国の根本とした。「社」を大地の神とし、「稷」を穀物の神とし、「社稷」と並列して一語として「国家」の代名詞とした。後漢の班固の『白虎通義』に「人は土に非ずんば立たず、穀に非ずんば食わず。土地は広博にして遍く敬うべからずなり；五穀は衆多にして一一祭るべからずなり。故に、土を封じて社を立て、土尊の有るを示す。稷は五穀の長、故に稷を封じて之を祭る」とある（「土尊」は大地の神）。農業の発展につれ、「稷」の農作物の中に占める重要度はどんどん低くなっていったが、「社稷」は国家の代名詞として使い続けられ、北京の中山公園には明代の社稷壇が今でも保存されている。

来と麦

「麦」はもと「麥」と書いた。清の朱駿声の『説文通訓定声』は「麥」の「本来の訓は『往來』の『來』とすべきであり、至るである。『夂』に従い、『來』の声である。『往』と同じ意味を表し、古来より『來』の字と通用する」と述べる。朱駿声の説に従えば、「麥」の本義は「往來」の「來」であり、「來」の本義は「むぎ」であるということになる。し

かし、これは後世の字体にもとづいた字形分析で生じた誤解である。

甲骨文字において、本来「來」と「麥」は区別されておらず、字体は数十種に上る。「來」は「𠂔」「𠂕」「𠂖」のような字形を指し、穂の傾いた麦を描いたものである。中央の線は茎、下部は根、左右は斜めに垂れた葉、上端は穎（穂先）、間の小さな点は麦の粒である。甲骨文字に「庚辰に貞う、來を受くるか……來を受けざるか」とある（黄浚『鄴中片羽三集』四五・七）。これは麦が豊作かどうかを占った文である。甲骨文字の「來」は「往來」の「來」としてもよく使われた。例えば、「王、來たり人方を正（征）す」（「南明八七六」）〔「人方」は部族名〕。この二つの意味を区別するため、甲骨文字の段階でもう「麦」の旧字体「麥」が造られた。字形は「𠂗」「𠂘」である。麦の根の部分が強調され、筆画が増えている。篆書以降、根部を表す筆画が主茎を表す筆画と分離し、「夂」と書かれるようになった。（李孝定『甲骨文字集釈』、歴史言語研究所、台北、1970年）

甲骨文字に「來」や「麥」が見られるが、小麦の原産地は中原地域ではない。国際的に公認された小麦の原産地は西アジアである。現代の考古学における最も古い小麦の種子は今から約三千八百年前のもので、新疆孔雀河河畔の古墓溝墓地で発見された。大麦の原産地は中国の西南地区で、チベット地区の食糧生産は今でも大麦が主である。現代チベット語のハダカムギ（大麦の変種）はneと言い、「來」「麥」と発音が近い。麦は殷代にはもう東方に伝来しており、中原の人々に認識されていたと考えてよい。しかし、殷代に大麦と小麦が明確に区別されていたか否かに関してはまだ確認がない。

殷王朝の麦は主に他部族から略奪したものと献上されたものであった。略奪して獲得した麦は殷代の人々にとってたいへん貴重なものであったため、主として祭祀の供物に用いられ、卜辞では「登秣（麦）」と表現された。

殷代になると中原地域でも少しずつ麦を栽培するようになった。栽培方法は西域と同じで、春に種を蒔き秋に収穫した。中原地域は比較的温暖であったため、春秋時代以降、秋に種を蒔き夏に収穫する「冬小麦」が現れた。この耕作方法の改良は極めて大きな意味を持っていた。まず、二毛作を行う土地面積が拡大し、単位面積当たりの生産量が向上した。次に、冬小麦の収穫時期はちょうど秋に収穫する食糧の端境期に当たり、当時深刻であった食糧不足の有効な解決策となった。他には、麦の食用方法も漢代以降は大きな変化が生じた。もともと麦を用いて粥を作るだけであったのが、麦を粉に挽いて蒸しパンなどを作るようになり、麦の食用がより好まれるようになった。以上のような変化の結果、麦の作付面積は拡大を続け、北方地域で最も重要な農作物の一つとなった。

菽と豆

古代、大豆を「菽」と呼んだ。「菽」はもと「尗」と書き、『説文解字』に「尗、豆なり。尗豆の生ずるの形に象るなり」とある。「尗」は象形文字で、中央の横画は土地、縦画は茎、上部の一点は莢、下部の二点は根瘤を表す。「尗」から「叔」が派生し、字形は手で豆を拾うことを表し、本義は「拾い取る」である。例えば、「九月、苴を叔ふ」（「苴」は麻の実；『詩経・豳風・七月』）「叔」はまた豆を表す名詞としても使える。例えば、『莊子・列御寇』に「子は夫の犧牛を見たるか。衣するに文繡を以てし、食わしむるに芻叔を以てす」とある（「犧牛」は祭祀の供物とする牛；「文繡」は美しい刺繡を施した布；「芻叔」はまぐさと大豆）。後に、「叔」が兄弟の長幼の序を表す語として使われるようになったため、草冠を加えた「菽」で豆の意味を表すようになった。また、「豆」は本来器物（食物を盛る足つきの台）の名称であったが、「豆」と「菽」の古音が通用したため、「豆」で「菽」の意味を表すようになった。先秦時代の文献ではまだ「菽」が優勢で、「豆」で豆を表した例は『戦国策・韓策』の

一例のみであったが、秦漢以降は「豆」の字を使うのが通例となった。

大豆は非常に早く中国の歴史に登場した。『史記・周本紀』は、幼少時より「麻、菽を種樹するを好む」という后稷に関する言い伝えを載せている（「種樹」は栽培する）。『詩経』には「菽」と「苳菽」の記載がある。「菽」はマメ科の総称で、「苳菽」は豆類作物の一種（大豆）である。現時点において、中国で発見されている最古の大豆の実物は、春秋時代の晋の国の作物で山西省侯馬市で出土したものである。大豆は生産量が低く、成長に時間もかかるが、栽培は簡単で、肥料も必要なく、耐乾性も高い。

中国は古来自然災害による飢饉の多い国であったため、西欧の学者は我が国を「飢饉の国」(The land famine) とさえ呼んだ。そのため、古代の人々が大豆を栽培したのは「保歳」（端境期をなくす）という理由が大きい。前漢の農学書『汜勝之書』の記載によれば、当時の農家は凶作の年でも餓死を免れるよう、一人当たり五畝（約9.1アール）の比率で大豆を栽培したという。また、豆類が農作物の中で占める地位は社会政治とも非常に密接に関連していた。春秋戦国時代は社会が混乱し、戦争が頻繁に発生したため、豆類の地位が急速に上昇して「粟」（穀類）と並び称され、重要な食糧作物となった（「菽粟」と書いて食糧作物を指す）。漢代は社会が安定し、農業生産も大きく発展したため、豆の栽培量が少なくなった。この時期は、たとえ飢饉を救うためでも、黍、稷、蕎麦などの短期作物が多く栽培されていた。魏晋南北朝時代は北方で何年も戦乱が止まず、農地が荒れ果てた。北魏の時代になってようやく農業生産の回復が図られると、まず荒地を開墾して黍、稷を栽培した。その後、豆類と穀類の輪作が開始され、漢代と比較して豆類の地位は明らかに高くなった。（梁家勉『中国農業科技史稿』、中国農業出版社、1989年）

大豆はたんぱく質とアミノ酸を豊富に含む。春秋戦国時代以降、大豆

は徐々に主食から副食に変化した。戦国時代には味噌を作る材料として豆鼓とうし（大豆を発酵させて作った食品）がすでに用いられていた。伝説では、豆腐は前漢の淮南王劉安が発明したとされ、すでに二千年を超える歴史がある。また、漢代には豆もやしもすでに食べていたようで、馬王堆漢墓の161号竹簡にその記録が残っている。現在、世界各地で栽培されている大豆は、すべて直接あるいは間接的に中国に源を発する。ラテン語系言語で大豆を指す語の発音はいずれも「菽」の音に似ている。例えば、ラテン語 soja、英語 soy、フランス語 soya、ドイツ語 soja、ロシア語 соя、等々。（上掲『中国農業科技史稿』）

大豆は経済的価値に富むだけでなく、植物自体に土地を肥やす作用があり、豆柄も燃料として使える。また、大豆の根瘤菌は空気中の窒素を取り込み、地力を肥やす。大豆にこのような作用があることを古代の人々は気づいていた。前掲『汜勝之書』は「豆に膏有り」と表現している。したがって、新しく土地を開墾するときはよく二毛作で大豆を植える。冬小麦も大豆と輪作することが多かった。

2. 農具

農具は農業生産力の発展水準を示す重要な指標である。漢字を通して、原始農業から現代農業に至る過程で農具に発生した大きな変化を見てみよう。

力、耒、耜

「力」は最も古い農具で、土を掘るのに用いた。古代伝説の中にその痕跡が残されている。言い伝えによれば、中国の最初の「穀神」は炎帝の息子の柱で、後に稷と呼ばれた人物である。なぜ「柱」という名前が

つけられたのか。古代神の名前には、往々にしてなんらかの原始事物に対する崇拜が反映しているものである。ここで「柱」は最も原始的な農具の化身である。原始農業の初期段階において、人々は先の尖った木の棒を用いて土を掘り種を蒔くことしか知らなかった。「柱」とはそのような木の棒が拡大し神格化されたものである。「力」という字は甲骨文字で「𠂔」と書く。先の尖った木の棒を改造した農具の形を描いたものである。字形の下部には傾斜角があり、真っ直ぐな棒より土を掘りやすくなっている。下部の短い一画は、掘削力を強めるために取り付けた、足で踏む横木であろう。卜辞の中に「癸巳に貞う、其れ力するか。一には力せずか」とある（郭沫若『殷契粹編』三六九）。これは「力」を用いて耕作をするか否かを占ったものである。

「男」という字は甲骨文字で「𠂔」「𠂔」と書き、「力」を用いて畑で耕作するさまを描いている。「男」の本義は野良に出て働くことであるが、後に「男」は男子の意味を持つようになった。「𠂔」の字は甲骨文字で「𠂔」と書き、複数の農具が協力して働く意味を表す。「力」は木の棒を簡単に加工しただけの農具であったため、使用に労力を要し、効率も悪かった。一方、穴を掘っての種蒔きは時間に追われる作業であったため、多くの人が協力し合う必要があった。生産力の発展につれ、「力」は徐々に他の農具に取って代わられ、「力」という字も力のような抽象的意味を表すのが主たる用法になった。

「耒」と「耜」は本来形態も構造も異なる二種類の木製農具であった。「耒」は木の枝の形を真似て作った土を鋤く農具で、先が分かれている。甲骨文字では「𠂔」と書き、金文には「耒」「耒」のような手で「耒」を持った字形が残されている（容庚『金文編』、中華書局、1985年）。「耜」は木の棒の形を真似て作った、土を鋤いてならず農具であり、早期の農具「力」の発展形である。甲骨文字では「𠂔」と書かれる（徐中舒「耒耜考」、『中央研究院歴史言語研究所集刊』第2巻第1分冊、1930年）。

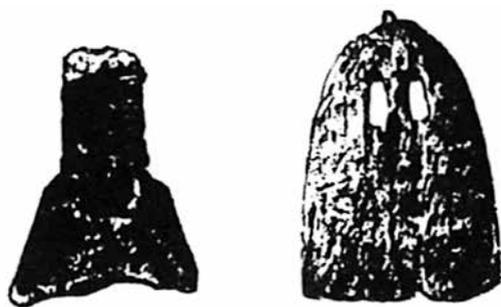


図1 河姆渡遺跡から出土した骨耜と木耜

生産力の発展につれ、「耒」も「耜」も徐々にその原始的形態を脱し、現存する文献に見られる「耒」と「耜」はすでに合体して一種の農具を表す複合語となっている。『易経・系辞下伝』には「包犧氏没して、神農氏作り、木を斲りて耜と爲し、木を揉めて耒と爲し、耒耨の利、以て天下に教ふ」とある。「耒」と「耜」はそれぞれ「耒耜」の異なる部位を指し、下部の土を掘り起こす部分を「耜」と呼び、上部の手に持つ部分を「耒」と呼んでいる（「耒耨」は土を鋤き草を刈ることを言うが、「耒耜」の誤りである可能性がある）。（図1参照）「耒耜」は古代における農耕の主要農具であり、各種農具の通称としてもよく使われた。そのため、他の農具、特に木製あるいは木製の柄のある農具を表す文字は、「耜」「耜」「耜」「耜」「耜」「耜」「耜」「耜」「耜」「耜」など、部首に「耒」を用いたものが多い。また、これらの文字の多くは二つの意味を持ち、特定の農具（名詞）としても、その農具を用いて行う作業（動詞）としても用いられた。

「耒」を部首とする文字を通して、我々は古代の礼制の一部を知ることできる。甲骨文字で「耜」の字は「耜」と書き、人が手と足を使って「耒」を操作する姿を描いている（郭沫若『甲骨文字研究』、科学出版社、1962年）。金文では「昔」が声符として加わり、「耜」は象形文字

から形声文字の「𠂔」に変化し、後に「籍」と書かれるようになった。この本来象形性の非常に高い文字は、古代文献の中では特に天子が自ら耕す農地を指した。『礼記・月令』に「天子、親したしく耒耜みずかを載せ、……躬みずから帝籍を耕す」とある。天子が自ら耒耜を手に取り土地を耕すというのは、もちろん形式的なものにすぎないが、中国古代の儀式の一つであり、「籍田」と呼ばれた。毎年春耕の前に、帝王は自ら宗廟祭祀の儀式を執り行い、自らが耕作に励むという行為は、政権の農業に対する重視を明確にして人民に農耕を奨励し、生産力を向上させようとする意図を持ったものである。

辰と農

「辰」は甲骨文字では「𠂔」と書く。鎌の類いの除草に用いる原始的な農具で、字形上部の「𠂔」は甲骨文字では「石」を表し、「辰」が石製の除草農具であったことがわかる。「辰」は「𠂔」とも書いた。考古学調査によると、初期の除草農具には天然の貝殻で作られたものもあり、字形下部の数本の縦線は貝殻の筋を表している。この字は後に「蜃」と書くようになった(郭沫若『甲骨文字研究・積支干』)。前漢の劉安の『淮南子・汜論訓』に「蜃すを摩くさぎりて磨くさぎる」とあり、これは蛤の殻を研いで鋭くしてから草刈りに使うという意味である。「辰」は古代文献の中でよく他の意味に使われた。例えば、十二支の第五支を表す；年月日を記録する；二十八宿の一つの房星を指す——星座と農業は密接に関係したため、星に農具の名を付けた。後に、「辰」は広く二十八宿を指した。この意味は「辰」の常用義となり、除草用農具という本義は逆に使われなくなった。

「農」の字は甲骨文字で「𠂔」「𠂔」と書き、「辰」と「𠂔」あるいは「𠂔」からなる。「𠂔」と「𠂔」の意味は同じで、この字形は「辰」を用いて草木を刈り取るさまを描いている。金文では「農」を「𠂔」「𠂔」と書き、

字形に田畑や農作業を行う手や足といった要素が新たに加えられている。金文の「農」の字は「農」の繁体だと見てよく、それに対して甲骨文字は簡体である。「農」の繁体は「辰」という農具の使用には大変な労力を要したことを表している。「辰」は中耕期に用いる後世の除草農具とは異なり、種をまく前に荒野の雑草を刈り取り、新田を開墾する道具である。一方、「農」は手に「辰」を持ち除草する作業を表す。

原始時代の農耕作業は、播種が終われば収穫を待つだけで、除草し新田を開墾することはすべての生産活動を先導するものであった。そのため、「農」という作業が人々に重視されたことは言うまでもなく、甲骨文字には「農」を神の名として祭祀を執り行ったことが記録されている。後に人々は農業の創始者を「神農氏」と呼び、また「農」という字を農業の総称とした。

この播種前の開墾に用いる「辰」という農具は、荒地の減少と既耕地の大量増加につれ、特に金属製農具の出現によって徐々に用いられなくなった。中耕と除草が農耕の重要な一環になった後、新たな中耕除草用の農具が考案された。殷代に現れたのは「錢」と「鑄^{はく}」である。「金」を部首としていることからわかるように、「錢」と「鑄」は石や貝殻ではなく、青銅を用いて作られた農具である。

刀、刈、鎌

考古学調査によって現在すでに新石器時代の石刀や蚌^{ほう}刀が多く発見され、それらが当時の刈り取り用農具であったことも証明されている（「蚌」はドブガイ、ハマグリ）。「刀」は甲骨文字で「刂」と書き、柄のついた刀の象形である。また、「利」は「利」「利^か」と書き、「刀」で「禾（穀類）」を刈り取り、切り滓が飛散するさまを描いている。しかし「刀」は刈り取り専用の農具ではなく、一般的な切断用工具である。例えば、「初」は「刀」を用いて「衣」を造る布を裁断する、「剛」は「刀」で「網」

を切断する、「劓^ぎ」は「刀」で「鼻」を削ぐという意味である（「劓」は中国古代の刑罰の一種）。切断する対象の違いによって、刀の形状にもさまざまな違いが生じ、それを表す専用の名称と文字が造られた。

「刈^{がい}」はもっぱら草刈りや穀類の刈り入れに用いる農具である。考証によると、甲骨文字に見える「𠂔」と「𠂕」の二字が「刈」の初形である。この二字は「𠂔(禾)」と「考」に従う会意文字で、「𠂔」は刈る取る対象の雑草や穀物を描き、「考」は刈り取りの道具を描いたものである。「考」は始め「𠂔」「𠂕」と書いた。下部は「刀」の象形である。「刈」は後に「𠂔」「十」と簡略化され、篆書ではさらに「刈」となって、最初の字体とは大きく異なる。その後、類別化の必要から、再び「刀」を加えて「𠂔」と書くようになった（裘錫圭『甲骨文字考釈・釈𠂔𠂕』、『古文字研究』第4集、中華書局、1980年）。

「刈」の様式はどうだったのであろうか。春秋時代の『国語・齊語』に「時の雨既に至る。其の槍、刈、耨、鍤を挟み、旦暮を以て田野に従事す」とあり、これに対して三国時代の呉の韋昭は「刈は鎌なり」と注す（「槍」は草を刈る農具；「挟」は手に持つ）。すなわち、「刈」とは鎌であり、考古学調査でも殷代中期以降の石製の鎌や蚌製の鎌が多く発掘されている。殷墟宮殿区の一つの穴蔵だけで数百本の石鎌が発見されたことさえある。しかも、鎌はすでに定型化しており、現在の鎌と同じく、刃の側がくぼんだアーチ形をしている。そのため「刈鉤^{がいこう}」とも呼ばれた。鎌という農具は非常に早く現れたが、その呼び名としては「刈」あるいは「刈鉤」が初期の通称であり、「鎌」は方言にすぎなかった。前漢の揚雄の『方言』五に「刈鉤、江淮陳楚の間は之を鋤^{しろう}と謂う、或いは之を鋤^かと謂う、(函谷) 関自り西は之を鉤と謂う、或いは之を鎌^{れん}と謂う、或いは之を鋤^{けつ}と謂う」とある。字形から見れば「鎌」は「金」を部首としているので、春秋戦国時代における鉄器の大生産を背景に生まれたものと推論できる。この時代に至り、鉄鎌が石鎌に取って代わったのである。

農具の名称として「鎌」は徐々に方言から共通語になり、もっぱら農作物を刈り取る農具を指した。

春秋戦国時代の鎌には二種類あり、一つは穀物の茎を切るのに用い、もう一つは穂を切り取るのに用いた。後者は「銚ちゅう」とも呼ばれ、『説文解字』には「銚、禾かを穫る短鎌なり」とある。「銚」は「鎌」と並び当時の農民たちの必需品であったようだ。『管子・輕重乙』に「一農の事、必ず一耜し、一鈹たい、一鎌か、一鋤どう、一椎つひ、一銚ちゅう有り」とある（「鈹」は大型の鋤：「鋤」は「耨」に同じ；「椎」は槌）。「銚」はもっぱら穀物の穂を刈り取るために用い、比較的軽便であったため、史書には、古代の帝王が象徴的に収穫するときには「銚」を用いたと記載がある。例えば、『漢書・王莽伝』に「予の西めぐに巡るに、必ず躬みづから銚を載せ、縣毎に則ち穫りて、以て西成を勸めん」とある（「西成」は秋の収穫に関わる農作業）。しかし、現在「鎌」と「銚」の区別はなくなっている。

犁

「犁れい」は耕地用の農具で、「牛に従い、利の声」の形声字である。この字形を見ると、「犁」という文字が「牛」を部首としているのは、牛を使って引いたからだと考える人が多いと思われる。しかし、この文字が造られた当時、「牛」と「犁」はそういった関係ではなかった。

語源の角度から言うと、「犁」は「黎れい」「黧れい」と同源字であり、いずれも「黒い」という意味を表した。『広韻』に「黧は黒にして黄なり」とある。「黎」も黒色を表す。例えば、周代には庶民を「黎民」と呼び、秦代には「黔首けんしゅ」、漢代には「蒼頭」と呼んだ。「黎」「黔」「蒼」はすべて黒色の意味で、黒い頭髪を指す。古代には、官や士、また富豪は常に冠や巾を頭にかぶり、庶民のみが頭髪を露出させていたため、黒髪が庶民の代称となったのである。「犁」という文字はもっぱら牛の黒に黄の混ざった毛色を指すために造られた。例えば、『論語・雍也』に「犁牛

の子、^{あか}駢くして且つ角あらば、用ふること勿からんと欲すと雖ども、山川其れ捨てんや」（黒に黄のまだら牛の子でも、赤い毛並みで、また角の形がよければ、[祭祀の供物として] 用いないでおこうと思っても、山川の神々の方でそれを見捨てたりはしない）とある。このように、最初「犁」は色彩の関係で「牛」と結ばれていたのである。

耕地農具としての「犁」は「耜」から発展してきた。「耜」を使うときは、足で「耜」の下部に付けられた小さな横木を踏み、その力で土を掘り起こす。「犁」は「耜」の拡大版のようなもので、先の尖った木を曲った木の先に取り付け、それを引っ張って土を掘り起こした。初期段階では、「犁」は木製あるいは石製で、人力で引いた。また、「犁」とも呼ばれておらず、「耒耜」という一般名で呼ばれていた。考古学調査によれば、春秋戦国時代に「鉄口犁」が出現した。「鉄口」というのは、「犁」の下端の土を掘り起こす部分に取り付けられた三角形をした鉄片のことで、後にそれは「鏃^か」と呼ばれた。当時の「鏃」はまだ比較的小さく、狭くて浅い溝を掘り起こすことしかできなかった。漢代以降、「犁」は大きな発展を見せ、「鏃」の先端部は鈍角から鋭角に変わり、さまざま形式の「犁」が造られるようになった。掘削の質を高めるため、「鏃」にへらを取り付け、土を片側あるいは両側へ掘り起こせるようにした。そうすることで、土をほぐし、砕き、掘り返す「犁」の機能が強化され、同時に地面に残っている葉や草に土をかぶせ地中に埋められるようになった。この「犁」という農具は今もなお使われている。

「犁」がなぜ「犁」と名づけられたのかというと、文字が創られた当時の音声言語で分離分割することを [li] と言ったからである（例えば「劓」「鑿」「耒」など、すべて [li] と読み、分離分割の意味を有する）。「耜」から発展した耕地農具は、まさに土を掘り起こして溝を造る（土を両側に分離させる）道具であったため、「li」と呼ばれた。この耕地農具に対して、人々は新しい文字を造らず、牛の色を表す「犁」の字を

借用した。それは「犁」の声符「利」の発音が分離分割の [li] に等しいだけでなく、形符の「牛」も耕地農具としての「犁」の意味と関係するからである。当初、「犁」は人力の耕地農具であり、現代では機械であるが、「牛」と「犁」は手を携えて中国の大地で二千年もの長きにわたり勤勉に働いた。両者の関係は密にして不可分である。

翻訳メモ：

古代中国の社会ではほとんどの人が「四民」（士、農、工、商）に属し、残る一部が帝、王、将、相、公、卿、大夫であった。「四民」の社会的地位は低かったが、中華文明の殿堂を創り上げたのはまさに彼ら「四民」であった。漢字の中には、「四民」が日々の実践の中で獲得した多くの貴重な体験が溶け込んでいる。中国の農業はその誕生から数えるとすでに一万年近くの歴史がある。中華民族の生存と繁栄、文明と進歩はすべて農業と密接な関係があり、中国の農業発展史はまさに中華民族の古来の文明史でもある。

この農業発展史の展開についてさまざまな研究が行われていると思うが、農業と関係する漢字の創造に対する考察は、私にとって特に面白い視点である。それによって、農業と関係する漢字には、中国の農業文化の発展の痕跡が鮮明に残されていると強く感じた。

本稿は〈農業と漢字〉の前半で、農作物と農具の漢字字形構成の根拠、また絶えず繰り返される派生の歴史的経緯などについて観察したものである。後半に農地と水利、農耕制度、穀物の加工と貯蔵などについての考察が行われ、それらの内容は次回に続く。

本稿は樹立社による『漢字文化大観』（杉村博文監修）の日本語翻訳（本稿で翻訳した第14章は2025年春以後出版見込み）で筆者が担当した翻訳箇所を考察等を書き加えたものである。尚、本稿は字数の都合上、一部の翻訳を省略した。